
大魔王のひみつ（大魔王が倒せない番外編）

はぐれっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔王のひみつ（大魔王が倒せない番外編）

【Nコード】

N2380Y

【作者名】

はぐれっち

【あらすじ】

大魔王が倒せないの外伝短編集です。バトルとかあまりない、日常系メインになります。大魔王が倒せないのネタバレが含まれますし、読んでいないという意味がわかりませんのでご注意ください。

Web拍手で書いているおまけ小話の古いものを移してきたものです。Web拍手ですでお読みになられた方は読む必要はあまりないかとも思いますのでご注意ください。

本編もそんなに面白いわけでもないかも知れませんが、こちらはさらにくだらない内容になっています。

R15、残酷な描写ありは今のところ該当しないと思いますが、本編が該当するためこちらにも念のためつけています。

大魔王ファンクラブ（前書き）

1章完了後ぐらいの話ですので、本編1章まで読了後にお読みください。

あと、少々下品かと思えます。無理だと思ったらバックしてください。

大魔王ファンクラブ

大魔王ファンクラブ。

いつの間にかそんなものが首都ベイヤーで結成されていた。

大魔王のファンがより集まり自然とその規模を大きくしていったもので、今では300人を超える会員が集まっている。

人が集まればそこには序列が出来、会長を頂点にピラミッド型の位階が形成された。

彼らの活動の主なものは大魔王をつけ回すことだ。

つかず離れず大魔王の活動を監視し喜びに浸る。その一挙一動にほればれとし、ため息を付く。

他には大魔王の写真を撮り、会報を作り、会合を開いた。

そんな大魔王ファンクラブでは今、ある論争が持ち上がった。それは大魔王は排泄行為を行うのか？ という余人にとってはどうでもいい、だが会員たちにとってはとても真剣な話題だった。

まず、大きく分けると「しないよ派」と「するよ派」に分かれた。「するよ派」は大魔王といえども普通の少女だ。するに決まっているだろうと、血走った目で訴える。というかしてくださいという感じだった。傍から見ていると、ただの特殊な性癖の持ち主にしか見えなかった。だが、それに賛同するものもかなりいた。

対して「しないよ派」は想像力にあふれるロマン派ともいえるが、ちよつと無理があつた。「するよ派」からすると、お前らファンタジーの世界にでも生きてるつもりかよ、となる。実際議論が白熱するとそれに近いことも言っていた。

ただ一見議論するに値しないと思われる「しないよ派」を後押しする理由がある。それは、大魔王を日夜つけ回し続ける彼らが大魔王がトイレに行く姿を見たことがないということだ。それが彼ら「しないよ派」の根底にある。

まず勢力としてはそれほどでもないが根強い派閥として「肛門が

そもそもない派」がいる。なければ排泄などしようがないということだ。この時点で大魔王は人間と同様の生物ではなく消化器官の存在も怪しくなってしまうがそこまでは考えていないのだろう。

対するは「肛門はあるが何も出ない派」だ。大魔王は精力的に食事を行なっている。故に消化器官はあるのだろうが、最終的には何も出ないというのがこの派閥の主張だがそれも苦しい。

それをどうにかしようとしたのが「肛門からは排泄物以外の何かが出る派」だ。だが、それも結局は何か出るのかを説明出来なかった。

そんな一般人から見ればどうでもいい議論が日夜繰り返された。そしてその果てしない議論の末に一人の勇者が立ち上がった。

副会長のデイトヘルムだ。彼は「するよ派」の急先鋒として知られ、大魔王の排泄物なら同量の金塊と交換してもいいと言い放つ剛毅な男だった。彼はこの業績により、第4の勇者とも噂されるようになる。

アレがヤバイ亭の窓際の4人がけの丸テーブル。いつもの席に大魔王は腰掛けていた。

向かい側にはまだ幼い少女が床に届かない足をぶらぶらとさせながら夢中になってプリンを食べている。

大魔王も同じようにゆっくりとスプーンを口に運んでいた。

「ライサさん、プリンはおいしいですか？」

「うん！　ありがとうお姉ちゃん！」

少女は元気いっぱいに答えた。

「遠慮無くいっぱい食べてくださいね」

「お前は少しは遠慮しろよ！」

追加でプリンを持ってきた給仕の少年デリクが苦々しげに言った。

「うちは酒場だぞ。なにプリンとか作らせてんだよ」

「オカミさんが作れるって言いましたよ？」

「普段こんなもん作ってないんだ。手間に決まってるだろうが！」

「こんな小さな子に怒鳴りちらすなんてひどいですね」

そう言われてデリクはライサと呼ばれていた少女を見た。夢中でプリンを食べていた手を止め、涙目で見上げる少女と目が合う。

「ああ、いやお前に言ってるんじゃないかってだな……どなって悪かったよ。泣くなよ、な」

デリクは慌ててライサをなだめた。そんな二人を横目に大魔王は悠然とプリンを食べている。

昼時を過ぎたせいか客はまばらだ。いつもなら、遊んでないで働きな！と女将から声がかかる所だが比較的余裕があるせいか静かなものだった。

そんな穏やかないつもの昼下がりにその男は現われた。酒場の扉を押し開き入ってくると店内を見渡す。大魔王を見つけるとまっすぐに行ってきて、ひざまずき頭を垂れた。

若い男だ。派手ではないが質の良い服装を上品に着こなしている。そのたたずまいから貴族と思われた。

デリクはその男を見て少し不機嫌になる。美男子だ。大魔王にちよっかいをかけに来たのかと思うと心がざわつく。

「大魔王様、お伺いしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「いいですよ。私はこの国の礼などには疎いので細かいことは気にせずに楽にしてください」

そう言われると男は頭を上げ大魔王を見上げた。

「私はデイトヘルムと申します。3等貴族で、近衛兵を務めさせていただいています」

「そうですか。ご苦労様です。それで聞きたいことはなんでしょう？」

大魔王はこの男の顔を見てわずかばかり記憶を刺激された。レガリア奪取時に適当に雷撃で倒した有象無象の中にいたような気がする。

デイトヘルムは言いよんだ。すぐに言葉が出てこない。何度も迷ったあげくようやく搾り出すように言った。

「大魔王様は……排泄行為を……その、なされるのでしょうか？」

店内の視線がこの一角に集中した。実はこの店にいるものの大半は大魔王ファンクラブの会員達だった。デイトヘルムが論争に決着を付けるべく立ち上がると聞いて集まってきたのだ。

「おしっことかうんちのことですか？　しませんよ？」

店内が一斉にざわめいた。嘆くものもあれば、歓喜にむせぶものもある。その様子は様々だ。

「究極生命体となつてからは、食事は完全にエネルギーとして消費

されるようになりましたので排泄は必要なくなったのです」

ディートヘルムの顔が驚愕に歪む。ひざまずいた姿勢ながら身体がぐらぐらと揺れそうになる。床が不安定になったように感じた。だが、それを抑えこむと毅然と顔を上げ言った。

「そ、それは……いえ！ だからと言って大魔王様への忠誠に変わりはありません！」

「ええー、おしっこしないの、お姉ちゃん！ いいなあ、私昨日もおねしょしてお母さんに怒られたのに……」

ライサがしょんぼりとする。余程怒られたのだろう。思い出しただけでも泣きそうだった。

「大丈夫ですよ。ライサさんも頑張れば究極生命体アルティメット・シینگとなって、排泄は必要なくなります」

「ほんと！」

「ええ、きつとなれます」

頑張ったぐらいで究極生命体アルティメット・シینگとかなれんのかよ……。つーか、なんで昼間の酒場でうんこの話してんだよ。

いろいろ言いたいことはあったが、デリクは呆れて声も出なかった。

「で、では肛門はあるのですか！」

店内がさらなる驚愕に包まれた。まさかそこまで聞くのか！ 勇者だ！ 新たな勇者の誕生だ！ さわめきが止まらなくなった。

「ありますよ。究極生命体と言ってもベースは人間ですので、身体構造は人間と同様です」

ディートヘルムの顔が喜びに包まれる。だったらいける！妄想で！つぶやくような声だったがその場にいた数人には確実に聞こえてた。

デリクはディートヘルムの性癖に正直引いていた。いくら美男子でもそれはない。

なんでこいつそんなことで喜んでんだよ！　つーが大魔王も何答えてんだよ！

いつの間にかディートヘルムの周りを会員たちが取り囲んでいた。そして肩をたたき讃えた。それぞれ思想や立場は違うのだから全員がよい顔をしていた。仕事をやりきった男を褒め称える改心の笑顔だ。

「究極のアイドルだ！」

誰かが叫んだ。

うおお！　感極まった声があたりをはばからず響く。

「女将！　酒だ！　ありったけもってこい！」

いつの間にかライサと大魔王はいなくなっていたが、酒宴はその日の夜遅くまで続いた。

いつまでも騒ぎ続ける男女の間を忙しく行き来しながらデリクは思った。

こいつら頭おかしいよ……。

大魔王ファンクラブ（後書き）

モー娘。でこんな話あったよなあ、というところから作ったネタですw

リーリアに忠告を（前書き）

2章完了後の話ですので、2章読了後にお読みください。

リーリアに忠告を

「集まってもらったのは他でもない」

そう切り出したのはディートヘルム、王の周辺を守護する近衛兵の男だ。

テーブルの前に立ちあたりを見渡している。アル、リーリア、イルはなんだかよくわからないといった顔で席に着いていた。

ここはアレがヤバイ亭の一室だった。内密な話をするために2階の個室が用意されていた。

「えーと、すみません、これは一体なんなんですか？」

アルが疑問を呈する。もつともな話だった。

アルたちはキャシー宅で今後の計画を練っていたのだが、そこに酒場から使い走りの少年デリクがやってきた。近衛兵の方が呼んでいるので酒場に来て欲しいと言う。断るのも角が立つかと思いついてやってきたが話が見えない。

「あなた誰なんですか？」

冷たい目でイルがディートヘルムを睨みつける。

「ああ、自己紹介がまだだったか。私はディートヘルム。近衛兵だ。まあ最近ではそれよりも、大魔王ファンクラブの副会長としてのほうが有名だろうか」

ディートヘルムは誇らしげに言った。近衛兵というよりも、大魔王ファンクラブの方に重きを置いているようだった。

「え、パエリアさん、ファンクラブとかあるの？ やっぱり綺麗な人は違うよね、アル君」

リーリアがファンクラブに反応した。すこし羨ましそうにも見える。

「うん？ パエリアとはなんだね？」

「え、大魔王さんのお名前ですけど……」

「なんだと！」

ディートヘルムが目をむき出し怒鳴った。リーリアは怯えアルにしがみつく。

「ディートヘルムさん、興奮しないでください」

アルがとりなす。これはちょっと怖い。

「それはどこで知った！」

「えーと、キャシーさんの家で、ですけど……」

「ああ、あの時か？」

「え？」

「私は非番の時は大魔王様を見守り続けている。それを副会長の権限を濫用しているとられても困るがな。ちゃんと順番は守っているぞ」

リーリアのアルを掴む力が強まる。何を言っているのか意味が分からない。

「ディートヘルムさんは大魔王をつけ回しているんですね？ そし

てそれはファンクラブのメンバーの間で順番に行われている。で、あなたが非番の時に自分の番が回ってくるように調整している。その活動中に大魔王がキャシーさんの家に行くのを見た……ということですか？」

アルがまとめてみた。まとめられるとよりいっそう怖くなったりーリアはますますアルにしがみつく。

胸押し付けすぎだと思うけど、気付いていないのかな……。

特に指摘はしなかった。

「そうだ。さすがに人の家にまで侵入することはないから、そこで何が行われているかまではわからなかったが……そうか……パエリア様が……可憐だ……」

いや、それは食い物の名前だろ？

とても言えなかった。恍惚とした表情で悦に入るこの男にそんなことを言えばどうなるかわからない。

「で、僕たちはなんのために呼ばれたんですか？ 大魔王の情報収集ということですか？」

「いや。違うのだが大魔王様の話を聞けるというならありがたい。他には何か聞いていないか？」

アルは言っているのか迷った。敵ではなさそうだし、大魔王のどんな情報をもらしたとしても大魔王が気にすることはないだろう。だが、こんなあきらかにおかしな様子の男に教えていいものか？ その逡巡をとらえるとディートヘルムは懐から長財布を取り出し

た。札を10枚引き抜くとテーブルにおく。

「10万リルだ」

「大魔王の着ているドレスは闇の衣というらしいですよ」

「ちよつと、アル君！」

リーリアがアルを睨みつける。怒りなれていないせいか拗ねているぐらいにしか見えない。

「別に黙つてると言われてないし、いいんじゃないか？ 10万リルは魅力だろう？」

「他には何かあるかね？」

札がさらに10枚、デイトヘルムの手に現われた。

「その闇の衣は光の玉ではぎとることが出来るらしいです」

「な、何だと！ はぎとるとはどういうことだ！」

「さあ、服がなくなつて裸になっちゃうんじゃないですか？」

デイトヘルムがぐらりとゆれた。そのまま倒れてしまうように見えたがなんとか持ち直したようだ。

「そ、その光の玉というのはどこにあるのだ！」

「さあ、そこまでは……」

「それはなんとしても手に入れねばなるまい！ い、いや私が使おうというのではないぞ！ 大魔王様の裸身をさらすようなことがあつてはならないからな！ 私がこの手に確保して誰にも使われないようにするしかあるまい！」

札が20枚になった。大金だ。

アルはうながされるままにあらたな情報を口にする。

「下着は闇の下着というらしいです」

「アル君！ それはダメ！」

リーリアがアルの腕をぎゅっとつねる。結構痛かった。

「ほう……それはさらに詳しく聞きたいところだな」

さらに10枚。30万リルがばさばさと振られる。

「色は黒です。レースっぽかったですね」

デイトヘルムの動きがぴたりと止まる。

アルは現金を前に調子にのりすぎた。

「見たのか？」

「ええ」

「キええ！」

怪鳥音と言うのか。鋭い呼吸と共にデイトヘルムの左腕が振るわれた。手にはナイフ。それがアルの目を目掛けて一直線に飛んできた。

アルは咄嗟に腕をあげそのナイフを掴みとった。ギリギリだ。瞳の数センチ先で刃先がぶるぶると震えている。

タイミングを同じくして、イルがテーブルの上に身をのりだしていた。

「にいさん……油断しすぎです」

その手にもナイフが握られている。ナイフは一呼吸で2本立て続けに投げつけられていた。イルがいなければ2本目が突き刺さっていたことだろう。

「あんた、何するんだ！」

アルが思わず立ち上がって怒鳴る。いきなりすぎた。今の会話でなぜこうなるのかさっぱりわからない。

「ああ、すまん、私の中で嫉妬が爆発した。悪く思わないでくれ。つい、大魔王様の秘密の花園を写したような、眼球など潰れてしまえばいいと思ってしまったのだ」

「それは思うだけにしてくれ！ 実行に移すな！」

なんでもないように言うディートヘルムにアルは戦慄した。

こいつ……かなり強い。

「まあそういきりたつな。私の悪い癖だ」

「その癖で何人も死んでそうだな！」

アルは気を取りなおして着席する。もう丁寧に話すのも馬鹿らしくなってきた。

「で、大魔王の話じゃなかったらなんで僕たちを呼んだんだ？」

「ああつい脱線してしまったが本題はそれではない。リーリア君、君だ」

その場の視線がリーリアに集まった。

「え？ 私ですか？」

リーリアが自分を指さして戸惑っている。

「うむ、ここしばらくリーリア君を見ていたのだが、君は非常に危うい！ これから旅に出るそうだが……心配になつてな。老婆心ながら一言忠告をと思ったのだ！」

「ちよつと待ってくれ！ あんた大魔王ファンクラブなんだろう？ なぜリーリアをつけまわしている！」

「大魔王様は至高の存在だが、だからと言って他の花に目を向けてはいけないわけではないだろう？」

「怖い……」

リーリアがぼそりとつぶやいた。つけまわされていたなんてまったく気づかなかった。

「それにだ、栄誉ある大魔王様番のローションは厳格に決められている。それ以外の時間はどう使おうといいだろう？」

「どんな理屈だ！」

ディートヘルムに何を言っても無駄なのか話は勝手に進められる。

「50人」

「は？」

「リーリア君に手をだそうとした男どもの数だ」

「どういうことだ？」

「こう言つとあれだが、リーリア君は非常に男好きのするタイプだ。街を出歩けばかならずちよっかいをだそうとしてくるものがある！」

「え？ でもそんな人見かけませんでしたよ？」

リーリアが不思議そうな顔で言う。

「ああ心配しなくていい、全て排除しておいた。女性は愛でるものだ。暴力に訴えむりやり事に及ぼうなど言語道断！」

「排除って……いつからだ？」

「大魔王さまとリーリア君がお会いしたあたりからだな。キャシーとやらのうちの周囲で見かけてから大魔王ファンクラブとして注目していた」

「それは……おかしくないか？ リーリアは一度さらわれたことがあるぞ？ その時は見ていなかったのか？」

「ああ……あれは痛恨のミスだった！ 私は北門の守衛所の前にいたのだが……そこで尿意を我慢する少女を見かけてしまったのだ！」

「はあ？」

「そうなれば……追わずにはいられまい！ 我慢しきれなくなった少女が物陰でいたすのではないかと思うと……」

「ちよつと待て！ 意味がわからん！」

「私が至福の一時を堪能して戻ってくるとリーリア君の姿はすでになかった」

「あほか！」

「にいさん、こいつ殺していいですか？」

即座に許可を出したい所だったが自重した。一応こんなでも貴族、近衛兵だ。

「反省した私はそれからは必ず二人以上をリーリア君につけることにした！」

「アル君……私もう帰りたい……」

リーリアが情けない顔でアルを見る。アルも同じ気分だ。

「大魔王ファンクラブは精鋭だ！ これで滅多なことはおきん！」

「いや……その大魔王ファンクラブが一番怖い」

「と、思っていたのだが、一般会員では対処できないものがあらわれたのだ！ 第三遊撃隊の勇者、ヴァルターだ！」

「え……いやちよつと待て！ それはないだろう！ なぜあいつが生きている？」

予想外の名前が出てきた。死んだところは見てはいなかったが、状況からして死んだと思っていた。

「うん？ なぜ死んだと思ったのだ？」

まさか自分が殺したつもりでしたとは言えない。やぶ蛇だった。

「いや……そう！ 第三魔族領は全焼してその場にいたものは全て焼死したと聞いたと思う」

「ああそのことか。それは第二遊撃隊のゴドウィンがどうにかしたらしいな。聖盾の力で、炎が収まるまで開拓団と共に地下へと潜っていたらしい」

第二遊撃隊のゴドウィン。アルは直接見たわけではなかったが、確か開拓団と物資を野族から隠すために別行動を取っていたはずだ。ならば、野族の襲撃もそいつがさばいたということかとアルは推測した。

「まあ、ヴァルターは私が倒しておいたから大丈夫だが」

「倒したのかよ！」

「ああ。まあ殺してはいない。さすがに勇者を殺してしまうと問題だからな。だがきっちり言い含めておいた。今後リーリア君に手だすことは二度とないと思う。思うが……あの男のことだ。もしやと

いうことはあるかもしれん。注意はしておいてくれ」

まじまじとディートヘルムを見る。先ほどの投げナイフだけでもその力量はうかがえた。しかし勇者に勝てるほどとは。

「あんた……勇者なのか？」

アルも勝ちはしたがあれは不意打ちだ。まともに戦えばどうなっていたかはわからない。勇者に勝てるとすれば勇者ぐらいのものだろうと思った。

「いや……大魔王ファンクラブ内では勇者と持ち上げられたことはあるが、遊撃隊員ではない」

「遊撃隊の隊長が勇者なんだよな？　勇者ってのはどうやってなるんだ？」

「勇者選定戦がある。国内で最強の実力者が勇者だ。戦って決めるのが当然だろう？」

「あんたは出なかったのか？」

「出たが……決勝は辞退した」

「なぜ？」

アルは聞かなくてもいい気がした。きつとくだらない理由だ。

「活動写真だ。最近開発されたのだが、写真が動くのだ！　素晴らしいだろう。その試写会があったのでな。少女たちがみずみずしいその体をさらけだし排泄する様をなんども繰り返し見ることが出来るのだ！」

「イル」

「はい」

「やっていい」

イルは即座に行動をおこした。席を飛び立つと、ディートヘルムの懐に入り、脇腹目掛けて拳を振りぬく。ディートヘルムは肘を拳に打ちおろしてそれを防いだ。

それ以上の攻撃が無理と悟るとイルは飛び下がり距離をおき、睨みつける。

「ほう、なかなかいい一撃だ！ 見所がある！ しかも、髪型は変だがよく見ると可愛いではないか！ 少女よ！ 君も大魔王ファンクラブの花となる資格があるな！」

「にいさん……死霊の王の発動を要請します！」
ロード・オブ・スペクター

素の状態でもイルの一撃は強力だ。身にしみてわかっている。ここまであつさり防ぐというのがアルには信じがたい。

「イル、下がってくれ」

全力を出して負けることはないだろうが、そこまでの意味もない。イルは凄いい形相だったが、しぶしぶ従い席に戻った。

ディートヘルムはいきなり殴りかかれたというのにまったく気にしている様子がなかった。子供の戯れとも思っただろう。強者の余裕が感じられた。

「で、リーリアに手を出しそうなのは大体倒したんだろう？ 問題なくないか？」

「だから最初に言ったではないか。旅に出られては我らの護りも及ばない。忠告したいのだと」

「ああわかったよ。注意するよ」

「事はそう単純ではない」

「え？」

「問題はリーリア君自身にもある」

再びリーリアに注目が集まる。

「まず……その胸だ！」

ディートヘルムがリーリアの豊かな胸を指さす。

「ひっ！」

リーリアが小さな悲鳴をあげて両腕で抱くように胸を隠した。

「それと、そのぼやんとした雰囲気だ！　それが、強く迫れば断りきれずになんとかなるんじゃないかと思わせる！」

「そ、そんなことないです！」

リーリアが必死に反論する。

「そうかね、ではアル君。ここでリーリア君に迫ってみたまえ！」
「なんでだよ！」

え？　とリーリアがアルを見た。少し残念そうだった。

「まあそれらの対策としてはもつと大胆な格好をすればいいと私は思っている。下手に隠そうとするからダメなのだ！　なんだその格好は！　ぶかつとした格好で体のラインが出ないようにと思っているのだろうが、そんなもの逆効果だ！　男をなめるな！　堂々としていれば逆に手を出しにくい、それが男の心理というものだ！」

「アル君……助けて……この人嫌……」

「分かるよ。僕も嫌だ」

アルはリーリアに優しく微笑んだ。

「それと……匂いだ！」

「匂いってどういうことだよ、別に臭かったりはしないぞ」

「匂いと言っても、普通の人間では意識的に分かるものではない。無意識化でそれが男を惑わせ惹きつける！」

「……あんたにはわかるのか？」

「うむ、専門的にはフェロモンと言うのだが、尿に含まれるのだ。私の得意分野だ！ 尿、経血、排便、この程度の距離ならその残り香を感じし分析することが可能だ！ それによればリーリア君はそのフェロモンが特別強力だ！」

ロード・オブ・スベクター
「死霊の王」

神速とっていいだろう。瞬時に間合いを詰めた二人はディートヘルムを殴り飛ばした。リーリアが顎を、イルが脇腹をそれぞれ殴りつける。上下同時の攻撃には対応しきれず、さすがのディートヘルムもこれには崩れ落ちた。

イルがそのまま頭を踏み潰そうとしていたが、それはアルが制止した。潰してもいいような気もしたが、宿屋に迷惑だろうと思いとどまった。

「帰ろう」

40万リルを手にアルたちはその場を後にした。大魔王の情報を伝えた時点で商談は成立していると考えてのことだ。

なんだか騒々しいと様子を見に来たデリクはディートヘルムが仰向けに倒れているの見た。それはどこかうれしそうな顔に見えた。

リーリアに忠告を（後書き）

書くの忘れてた内容を無理やりつつこみましたw

- ・第三遊撃隊勇者、ヴァルターのその後

- ・魔族領焼失のその後

- ・リーリアがなぜあんなに襲われそうになるのか。

王女誘拐（前書き）

これも2章後ぐらいだと思います。

王女誘拐

「ねえお姉ちゃんは大魔王なんでしょ？　大魔王ってなにしてるの？」

それはライサのそんな一言から始まった。

いつもの様にアレがヤバイ亭の窓際の席だ。大魔王とライサが座っている。

まだ幼い少女が一人で酒場までやってきているのは何かと物騒かもしれないが、それについてはあまり心配する必要がなかった。ライサにも大魔王ファンクラブがつきまといっているのだ。大魔王ファンクラブ自体が危険だとも思われるが彼らは決して花には手を出さない。ただ見ているだけだ。

「さあ、ライサさんはどう思うんですか？」

大魔王は質問に質問で返した。特にこれといった答えを持ちあわせていなかったのかもしれない。

「えとね、街に火をつけたりね、お城を壊したり、人間を食べたりしちゃうってこの絵本に書いてあるの。お姉ちゃんはそんなことしないよね？」

ライサは手に持っていた絵本を大魔王に見せた。表紙には黒い城を背景に、姫を背にかばった騎士とそれと向かい合う、真つ黒な影のような男。タイトルは「勇者王の剣」と書いてある。

不安そうな顔で見上げるライサの頭を大魔王は優しくなでた。

「ええ、別にそんなことをしても楽しくないですしね。人間もおい

しくないでしょうし」

「そう！ よかったあー」

ライサは笑顔を見せた。大好きな大魔王がそんなひどい事をしないと知ってとても安心した。

「その絵本はどんなお話なんですか？」

「えとね、魔王っていうのはね、とても悪いやつでね。お姫様をさらって、街に火をつけたり、お城を壊したりしちゃうの。でね、勇者様が魔王のおしろにお姫様を助けに行くの」

「そうですか。魔王というのはそういうことをする方ですか。確かにそんなイメージがありますね」

「でね、お姫様を助けた勇者様は王様になってお姫様と結婚するの」

そこにデリクがやってきた。トレイからミルクを2つ取りテーブルに置く。

「お、勇者王じゃねーか。昔よくおふくろに読んでもらったなあ」

デリクがライサの絵本を見て感慨深げにいう。まだ小さかったころ寝る前に読んでもらっていたことを思い出していた。

恐ろしげな魔王に勇敢に立ち向かう勇者。ありふれた題材だったがデリクは好きだった。

「そっぴやさ、大魔王。お前大魔王って言うてるけどさ、大魔王らしいことって何かしてるのか？ いつもここでただ飯食ってるだけじゃねーの？」

デリクが鼻で笑うように言う。いつまで経っても金を払わない大魔王に一矢報いたつもりだった。

「む。それは聞き捨てなりませんね。わかりました。私も大魔王を名乗るものです。たまにはそれらしいことをしてみせましょう!」

大魔王は妙な意気込みとともに立ち上がった。

マテウ国の第十三王女、オフィーリアはとまどった。自分のおかれている状況がまるでわからない。見当識障害、という言葉がまず思い浮かんだ。最近ならった言葉だ。

彼女は城の庭園でいつものようにお茶を楽しんでいた。陽気な昼下がり。王女といっても十三番目。特に王族としての仕事などない。ただのんびりと王族らしい振る舞いをしていればいいという気楽な立場だ。

常春の陽気にうとうとし、はしたないことにテーブルに突っ伏して寝てしまったがそれもいつものことだ。彼女付の侍女が外套を羽織らせ起きるまで側で見守っていてくれる。それが恒例だった。

だが、彼女は気がつくところをこわとしたシーツの敷かれたベッドの上で横になっていた。見えるのは薄汚い天井だ。

ゆっくりと身体を起こしあたりを見回す。ベッドと簡単な机が置いてあるぐらいの小さな部屋だ。掃除は行き届いているようだ。が小汚いという印象はぬぐえない。

ベッドの側では小さな女の子が目キラキラとさせて王女を見ていた。

その隣には黒衣の美しい少女。王女もこちらには見覚えがあった。大魔王だ。

「わあ！　すごい！　お姫様だあ！　すごい綺麗なふくだよ！　まっしろだよ！」

王女は純白の清楚なドレスを着ている。まさに絵本にでてくるようなお姫様の姿だ。

「むう、ライサさんは白いのが好きですか。黒いのは駄目でしょうか」

「ええー、ちがうよ。お姫様だからだよ。お姫様はしろいのがいいけど、お姉ちゃんも黒いのがいいよ！」

「そうですか」

大魔王は満更でもなさそうにうなずいている。

「お、お前は！　お前はなんてことしてやがる！」

王女は声がした方を向いた。扉にもたれかかるようにして少年が叫んでいた。今にも倒れそうだ。

デリクにも見覚えのある少女だった。国民なら誰もが知っている。二十人いる王女の中でもその可憐さで特に人気のある第十三王女、オフィーリア。こんな薄汚れた宿屋の一室にいていいような人物ではない。

「ふふっ、どうです！　お姫様をさらってきましたよ！」

「なんで！」

「大魔王らしくないと言ったじゃないですか」

「だからってなんでお姫様誘拐してんだよ！」

「わかりやすいでしょう？　お姫様を誘拐するなんてとても大魔王らしいです」

胸を張って言う大魔王はどこか誇らしげだった。

「……返してこい！ 今すぐ！ そして謝ってこい！ 今頃大騒ぎだ！」

「すいません、少しよろしいでしょうか？」

王女が口を開いた。

「私はさらわれたのでしょうか？」

のんびりとした口調だった。こんな状況に似合わないとても落ち着いた声だ。

「そうですね」

「……そうはならないのではないのでしょうか？」

「どうのことですか？」

「大魔王様はこの国の最高権力者です。大魔王様がお召しになられることに否やとなえるものはおりません。誘拐ということにはならないとおもつのですが？」

大魔王が目大きくひらく。

「それは……気が付きませんでした。なるほど、ではこのミッションを成立させるには、他国の王女を誘拐せねばならないということですね」

「頼むからそれだけはやめてくれ！ ほんと！」

デリクが悲鳴のように叫ぶ。声が上ずって裏返りかけていた。

「私からも重ねてお願い申し上げます。私でよければ大魔王様にお

仕えたいしますので他国の王女を誘拐するというのは考えなおしていただけないでしょうか？」

「……わかりました。そうですね。他国まで行くというのは時間もかかりますし」

しばらく迷ったようだが考えなおしたようだ。そんな大魔王を見ていたデリクは冷や汗が止まらなかった。

「あの……私をさらう際に、侍女のアリカなどは大丈夫だったでしょうか？ 怪我などをしていないでしょうか？」

「みなさんとても素直な方たちでした。王女をさらいに来たと言ったら庭園に通していただけましたのであなたを連れてきたのです。そのアリカさんという方も協力してくれました」

王の厳命により大魔王には絶対逆らうなと王城関係者には徹底されている。それゆえ王女拉致などという所業がなんの障害もなく実現できた。

大魔王は王城までゆつくりと歩いて行き、王女を肩に担いで同じようにゆつくり帰ってきた。その道中に目撃者は多数いたが特に騒ぎにはなっていない。街の人間も大魔王の奇行にいまさら驚かなくなってきた。

「ありがとうございます。私はマテウ国の第十三王女、オフィーリアと申します」

マテウ国には10人の王妃がいる。側室はない。全員が同じ立場だが、婚姻順に第一王妃から第十王妃と呼ばれている。オフィーリアは第九王妃の長女だ。

「さて……魔王というのは王女をさらってどうするのでしょうか？」

「さあ？ 私も誘拐されたのはこれが初めてですのぞ」

二人が小首をかしげる。さらった者とさらわれた者がさらわれた後どうすればいいかを考えている。間拔けな光景だった。

「ノープランかよ！ 先のこと考えて行動しろやこら！」

「む！ どうせ王女をさらったとしてもいやらしいことしか考えないくせにえらそうなことをいわないでください」

「ばばば、馬鹿いつてんじゃねーよ！ そそそそんなわけあるかい！」

デリクが目に見えて狼狽する。誘拐と言つ言葉にそこはかとなく淫靡なものを感じていたのは事実だった。

「魔王が男なら王女をさらう理由はそうなのかもしれません。しかしそうしてもわざわざ王女というのに理由があるのでしょうか？ 別に王女でなくても魔王などと名乗れるだけの實力があるならそこから見目麗しい娘をさらえばいいと思うのですが？」

「外交的な理由というのはどうでしょう？ 王女を人質に有利な交渉を行おうというのは？」

「それはそれで魔王としてはせせこましい理由に感じますね」

いくら考えたところで答えなど出るわけがなかった。

「ライサさんはどう思われますか？ 絵本ではなぜお姫様はさらわれるのですか？」

「えとねー、まじゅうおーっていう大きな怪物を起こすんだって。

それにはお姫様が歌うの」

「魔獣王？ その封印が王女にのみ解ける……ということなんですよるか？」

「ああ、そうだよ。その絵本だとそうだ。結局魔獣王は復活せずに、魔王は勇者にやられるんだけどな」

立ち直ったデリクが言う。

「そうですか。理由はあったんですね。でもだしたら私はどうしたらいいんでしょう？」

「知るかよ！」

「いやらしいこと……をすればいいんですかね？」

大魔王が怪しい目つきでオフィーリアを見る。年は大魔王と同じくらいか。肉付きもなかなかいい。触りがいはいそうだった。デリクがその光景を想像したのか生唾を飲み込む。

「ふふつ、冗談ですよ。ライサさんの前でそんなことするわけじゃないですか」

ライサいなけりやするのかよ！

「はい！ お姫様とお茶会がしたいです！」

ライサが元気よく手を上げた。採用された。

お茶会といっても場を階下の酒場に変えたただだった。いつもの窓際の席だ。

そこに大魔王、オフィーリア、ライサが座っている。テーブルに

は紅茶がおかれていた。

いつもとそう変わらない状況だったがライサはお姫様が目の前にいるだけで嬉しそうだった。

「ところで、大魔王だけ何もしないと言われたのですが、王女というのは何をしているものなのでしょうか？」

「はい、私も何しておりません」

「そうなのですか？」

「お兄様、お姉さま方は政務に携わっておられたりもするのですが、私のようなものと特に何もありません。宮廷作法の勉強などが王族らしいと言えばそうなのでしょうけど。いずれどこかの貴族が他国に嫁ぐのが役目かとも思います」

「なるほど……では私が特になにもしていないともいいんではないでしょうか？」

「お前はまず金を払え」

デリクがぼやきながら新しい紅茶をテーブルにおいた。王女が何もしていないのと大魔王が何もしないことに関連などない。

「その……大魔王様はどうしてこの国にいらしたのですか？ 目的などがあるのでしたら、何もしないということにはならないと思うのですが」

「そうですね。待っているのです」

「何をですか？」

「いろいろですね。例えばお父さん。最初は昔住んでいた家で待っていたのですが来る様子がありませんでした」

「お父さんはどちらに？」

「わかりません。私に気づくかと思っていたんですが……。まあ、大魔王と名乗っていればいずれ気づいてやってくるかもしれません。お父さんは真の勇者ですからね。きっと来てくれますよ」

「そうですか……会えるといいですね」

「はい。そういえば私が王女を誘拐したんですから、勇者が助けに来るといっているのではないのでしょうか？」

「さあ、勇者様ですか？ フォグ様は先だつての嵐で噴水がまた壊れたとかで修繕をされているようですし……ヴァルター様は瀕死の重傷と聞いています。動けるとしたら第二遊撃隊のゴドウィン様でしょうか？」

うわさをすれば影というわけか、その時酒場のドアが開かれた。

大柄な男が入ってくる。服の上からでも鍛え上げた筋肉が盛り上がっているのがわかった。明らかに戦いに身をおくものだと思われる。霧囲気を発している。

その男はあたりを見回すと王女のもとへとやってきた。

勇者ゴドウィン。聖盾の勇者と呼ばれる男だ。

ゴドウィンは大きな体を小さく屈めひざまずいたが、酒場のテーブルの間でも窮屈そうに見える。

魔王の元にいる王女を迎えに行く。特に危険はないと思われたが、念の為勇者が派遣されてきた。

「お迎えに上がりました。殿下」

「おお、おつきいですね！ お父さんと似た感じですよ！」

大魔王はひざまずいていてもその迫力を減じないゴドウィンを見下ろして言う。懐かしいものを見たような、どこか嬉しそうな顔だ。

「お迎えも来たことですし、今日はこれでお開きにしましょうか」

「はい、いきなりでとまどいましたが楽しかったです。誘拐はやめていただきたいですが、お呼びくださればまたおうかがいいいたします」

王女はゴドウィンと共に馬車で去っていった。

ライサと大魔王は表に出て手を振ってそれを見送る。

デリクはその光景を見て心底安堵した。自分の不用意な一言からまきおこったこの事件。それがなんとか無事に終わった。そう思った。

「むーお、むぐう」

派手な赤いドレスを来た女がベッドの上で身をよじっていた。猿さる轡ぐわをされ、手足も適当に縄でくくられ身動きが取れない状態だ。

女は勝気な瞳でその場にいる者、大魔王を睨みつけている。

「……えーと、何？ これ？」

デリクは膝から力が抜けそうになっている。すごい間抜けな顔をしていた。

いつものように大魔王が占拠した二階の一室がどたばたとやかましい。一言文句を言ってやろうとやってきたらこの状況だ。

第一王女、クリスティア。苛烈な性格から猛女として広く知られている。もちろん国民なら誰もが見知っている。

オフィーリアほど簡単には連れてこられなかったのだろう。強引な手法が見て取れた。

「第一王女様ですよ」

「なんで？」

「デリクさん、十三王女を連れてきた時すごい顔してたじゃないで

すか。第一王女を連れてきたらどんな顔をするのかと思ひまして」

大魔王が満足そうに微笑んだ。デリクは大魔王が期待した通りの変な顔をしていた。

王女誘拐（後書き）

あ、第一王女はこの後丁重にもてなされ、またまたゴドウィンさんが迎えに来た……とかだと思えますよw

しかし、二十人いるとか十三王女とか多すぎですね……。

路上にて（前書き）

今回はweb拍手の方は追加していません。

web拍手に新作追加するのも、何か拍手催促してるような気もしてきたので……。今後は拍手の更新と、こちらへの追加のタイミングはばらばらになるかも。

路上にて

夜のベイヤーの街を三台の馬車が連ねて走っていた。とても豪華な作りの馬車だ。外からは内部の様子をうかがうことはまったくできない。小窓のようなものもあったがそこには天鵞絨キローテで出来たカーテンが下げられている。

周囲は二十人からの護衛が馬車を守るようにして馬を進めていた。この厳重な警備の様子からも中の人物が貴人であることが予想できる。

月の明かりもあり、街中には街灯もあるが周囲はやはり薄暗く、馬車に取り付けられたランタンの明かりで周囲を照らしつつもその行進はゆるやかなものだった。

目的地はベイヤーの中でも貴族の屋敷が多きたちならば貴族街だ。ここまでくればもう少し。焦る必要もない。

「もうすぐですわね。お父様にお会いするのも久しぶりだわ」

馬車の中、水色の華麗なドレスを着た少女が隣に座る侍女に声をかけた。

「ブルーノ様も大層お喜びになるでしょう」

一等貴族ブルーノの一人娘、グリゼルダ。彼女は大学の長期休暇を利用し所領にある屋敷へと帰る途中だった。本来ならまっすぐに実家へと戻ればよかったのだが、父親のブルーノが王との謁見のため首都ベイヤーの別宅に来ている。そのためまずベイヤーで会うことになった。

グリゼルダは久しぶりに会う父親へのみやげ話についてあれこれと考えていたが、そのうち妙な事に気づいた。馬車がいつの間にか

その振動を止めていた。街中に入ってからには舗装がより整備されているためか馬車の揺れは少なくなっていたが、今は完全に止まっている。

「どうしたのかしら？」

「様子を見てまいります」

侍女が席を立つと馬車を出た。この馬車は三台のうち真ん中だ。先頭の車輛の御者へと様子を聞きに行った。しばらくして侍女が帰ってきた。困り顔だ。

「お嬢様……道に女性が倒れていたそうです」
「そう。それは難儀なことね」

グリゼルダは別に大したことはないと思った。ベイヤーは治安はいいほうだが、犯罪行為がまったく起こらないというわけではない。物盗りか何かの犠牲者なのだろうと考えた。それならばその女性を隅にでもよせればすぐにでも動き出せる。

だがいつまで経っても馬車は動き出さなかった。

「おかしいわね。もう一度見てきてくれないかしら？」

不審に思ったグリゼルダはもう一度侍女を使いに出した。

侍女は再度様子を見に外に出た。またしばらくして帰ってくる。

「お嬢様……その……動いてくれないそうです」

「どういことかしら？ 死んでいるというわけではなかったの？」

「はい。特に怪我をしていて動けないということではないようなのです」

「はつきりしないわね。どうして動かないのかしら？」

「それが……ここからは動けないの一点張りということとして、御者の方もほとほと困っておられて……」

「斬っておしまいなさい」

一等貴族の娘という立場でそれは可能だった。平民を無礼討ちにする。貴族の間でなら多少眉をひそめられる程度ですむだろう。彼女自身は領地を持っているわけでもないのだから正確には三等貴族だが、一等貴族の娘ということで準一等貴族という扱いになる。

ブルーノの権勢があれば、行進を邪魔した平民を殺したところさほど問題とはならない。

「お嬢様……それは……」

「なに？ わたくしに逆らおうというの？」

「いえ……伝えてまいります」

侍女がまた外に出る。

馬車は防音にも力がいれられていて、あまり外の音は聞こえないのだが、それでも慌ただしい様子はうかがえた。

まったく……わたくしをブルーノの娘と知っての狼藉かしら。だとしたら許せませんわね。

外の騒ぎがおさまった頃、侍女が帰ってきた。結構な時間が経っている。

「……お嬢様……」

ぼつりとつぶやいた侍女の顔は青ざめている。

「どうしたのかしら？ その女が死ぬ所でも見てしまったの？ あ

あ、別にそんな様子は報告してくれなくてもいいわよ」

「全滅しました」

「は？」

「護衛の者が全て倒れました」

「……どういうことですか？」

何を言われているのかわからなかった。相手は倒れていた女が一人のはずだ。二十人からの武装した兵士でかかって負けるはずもない。

「……私も信じられないのですが……ばいばいつと投げ捨てられて

……」

「何を言っていますの？」

「すいません……うまく説明できません……」

「もういいですわ！ わたくしがこの目でみてきます！」

グリゼルダは要領をえない侍女の言葉にいらだち馬車を飛び出した。

あたりを見回す。貴族街へと続く街路だ。馬車なら二台通るのはすこし厳しいぐらいの広さだが今は通行するものは何も無い。護衛の兵士たちは街路の端の方に積み重なっていた。気絶しているようだった。

兵士たちの乗っていた馬は所在なさに馬車の周囲でたたずんでいる。

先頭車輛のさらに先。道のど真ん中に女がひとり寝そべっている。確かにこれでは馬車が通れない。

侍女がランタンを持ち慌ててついていた。その明かりで女を照らして見る。

黒衣の女だ。黒く長い髪を後ろで適当にくくっている。貴族や王族の着飾った女達を見慣れているグリゼルダから見てもとても美し

いと思える少女だった。

その少女が道で横になり、両手をまっすぐ上に伸ばしている。何が面白いのかごろごろと回転したりしている。

「ちょっとそのあなた！ いったいここで何をしてらっしゃるの？ どいていただけないかしら？ 通れないでしょう？」

「寝ているんですよ」

「は？」

少女の返答が信じられなかった。少女は意味が伝わらなかったと考えたのかさらに言葉を重ねた。

「眠くなってきたのでここで寝ることにしたのです」

「意味がわかりませんわ！」

「そう言われても寝不足は体にわるいらしいですよ？」

「そんな所で寝るほうが体をわるくしますわ！」

「別にどこで寝てもいいじゃないですか」

少女が拗ねた。子供のようだった。

「よくないですわ！ どいていただけないかしら！」

「いやです」

「なぜ！」

「ここで寝ると決めたからです」

話がまるで通じていない。御者ともこのような押し問答を繰り返したのだろう。

「あなた、わたくしが誰だか知っていてそのような口を聞いてらっしゃるのかしら？ わたくしはドナート領主、一等貴族ブルーノの

一人娘グリゼルダですわ！　そもそもあなたごときが目通りかなうような相手ではなくってよ！」

「私は、魔界十七国を支配下におき、このマテウ国のレガリアを所有する大魔王です。その全ての権力を駆使してここで寝るといつているのです！」

少女は寝そべったまま大見得をきった。嫌な権力の使い方だった。

「はい？」

聞きなれない言葉がでてきた。大魔王。いや、聞いたこと自体はあった。なんでもこの国は大魔王に支配されているらしいと学友から聞いたことがある。だが何かの冗談だと思い本気にはしていない。事実この国の大半の者が大魔王に支配されているなどと信じてはいなかった。

「お嬢様……確かに大魔王がレガリアを所有し最高権力者になったと高札に掲示がありました」

「……これが？　この方が大魔王？　最高権力者？　馬鹿なことを言わないでくだらない！？」

苛立ちが侍女にぶつけられた。侍女は平身低頭してかしこまる。

グリゼルダは少女をにらみつける。大魔王だかなんだかは知らないが、護衛の兵士がやられたのは事実なのだろう。グリゼルダも貴族だ。力は平民以上にある。だが、兵士たちもまた貴族でそれになわなかったというならグリゼルダではどうしようもない。ほんの少しおもねることにした。

「ねえ、あなた。少し端によつていただけないかしら？　それで馬車は通れると思うのだけど？」

「そうですね。確かにそれで馬車は通れるでしょう。でもそれはいやです」

「なぜ？」

「先程も言ったようにここで寝ると決めたからです。そうですね、ではいいことを教えてあげましょう。ここを少し行った所から脇道に出れば私の後ろ側の道につながっていますよ。先へ行きたいだけならそうすればいいと思います」

少女は横になったまま、グリゼルダの後方を指さした。

道をそれる。少女の提案は悪くなかった。彼女たちはただ自分の別宅に帰りたいだけだ。少し遠回りになるがそれほど時間もかからない。だが、グリゼルダは意固地になった。ここで回り道をするというのは負けを認めるということだ。

「わたくしもいやですわ！ わたくしはここを通りたいのです！」

「お嬢様……回り道にしてもよろしいのでは……」

「あなたは黙っていて！」

「申し訳ありません」

グリゼルダは大魔王を名乗る少女をさらに、にらみつけた。少女は何か楽しそうにグリゼルダを見つめ返す。下から見上げているというのに妙に偉そうに見えた。

「わかりました。ではあなたは何か芸をお見せ下さい。それで考えましょう」

「芸？」

「なんでもいいですよ。一発芸というんですか？ 私を楽しませてください」

「なぜわたくしがそのようなこと！」

「今この道を支配しているのは私です。あなたがここを通れるかど

うかは私次第ですよ？」

グリゼルダは言葉に詰まった。腸が煮えくり返りそうだった。この無礼な女をどうにかしてやりたい。だが打つ手がない。

「くっ……あなた！ 何か芸はお持ちではありませんの！」

グリゼルダは侍女に聞いた。

「あ、それは駄目です。私はあなたの芸が見たいです」

「……わかりましたわ！」

芸などと言われても特筆すべきものはもっていなかった。

グリゼルダは考えたあげく、昔父親に大いに受けたあることを思い出した。にらめっこだ。

グリゼルダはしゃがみこむと大魔王に顔を寄せる。そして人差し指で鼻頭を上にあげて豚鼻を作り、寄り目をしてみた。

どうかしら！ 私の渾身の一芸！

それはそう大したものではなかったが少女には受けがたらしい。笑っていた。吹き出しそうになるのを抑えているように見えた。

「面白いですね！ そういうことをされないような方に見えたので意外性がありました」

「では通してくださいませわね！」

「え？」

少女は不思議なことを聞いたといわんばかりの顔をした。

「え？」

グリゼルダも思わず復唱してしまった。受けたはずだ。これで文句はないはず。

「私は考えると言ったのです。通すとは言っていないですよ？」

「卑怯ですわ！」

「それは……言質をとらなかったあなたが悪いですよ」

少女があたりまえのように言う。グリゼルダは恥を覚悟の上での変顔が無意味だったのかと思うと頭に血が上り倒れそうになった。

「まあさすがにこれは人が悪かったですね。では私のなぞなぞにお答え下さい。正解ならここを通してあげます」

「うそじゃありませんわね？」

「ええ。なぞなぞと言っても、ライサさんという小さな女の子から聞いたものです。そう難しくはないと思います」

「わかりましたわ！ どうぞ！ そのなぞなぞとやらをおっしゃってくださいな！」

「では。朝は天使、昼は淑女、夜は娼婦。これなーんだ？」

「……ちよつとお待ちください……それは本当に小さな女の子が言っただけなの？」

「ああ、間違えました。朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足、これなーんだ？ でした」

「全然違うじゃありませんの！」

「まあまあ、さあ答えをどうぞ！」

このなぞなぞならグリゼルダも聞いたことがあった。

「簡単ですわ！ 答えは人間です！」

朝昼夜は人間の一生を表している。朝は幼児期、赤ん坊の四つん這いで四本、昼は青年期で二本足で立ち、夜は老年期、杖をつくため三本足。グリゼルダが聞いた覚えがあるなぞなぞはこのような答えだった。

「はずれです」

「なぜ！」

「答えは私がそばにいる時の、テデスコさんです。彼は通常四本足ですが、私が朝からそばにいとストレスから自食行動に走り足を二本食べてしまうのです。ですので朝は四本、昼は二本です。夜には再生が始まって三本に戻り、翌朝には四本に戻ります」

「そんなのわかりませんわ！　しかもそんな答えを小さな女の子が考えているとはとても思えません！」

「私がアレンジしてみました」

「勝手にアレンジしないでくださらない！？」

大声を出しすぎてグリゼルダは疲れ果てた。声も枯れてきた。

「とにかくそんな、なぞなぞは無効ですわ！」

「そうですか？　人間という答えもかなりいい加減な感じがするのですが……」

少女は納得がいかないらしい。横になったまま腕を組み首をかしげている。

「大魔王じゃねーか？　そんなところで寝転がってなにしてんだ？」

どちらも譲らない硬直状態がしばらく続いた後に、少女に声がかけられた。その場にいたものの注目がその声の主に集まる。

「こんばんは。 Fog さん」

「 Fog 様！ この様な所でお会いするなんて……」

グリゼルダは少女との問答の徒労も忘れ目を輝かせた。 第一遊撃隊の勇者 Fog。 この国の少女たちにとって憧れの対象だがグリゼルダもその例にもれなかった。

Fog は貴族街の方からやってきていた。 グリゼルダがこれから向かうとしている側だ。

「この方と遊んでいたのです」

「遊んでなどいませんわ！ ……いえ、その遊ぶというか少しお話しを……」

グリゼルダは声を荒らげたあとにあわてて取りつくろった。

「 Fog さんはこんな夜更けにどちらに？」

「ああ、飲みに行くだけだよ。 アイゼンとかとな。 大魔王、お前も来るか？」

「はい、ごいつしよしましょう」

そういうと少女は立ち上がり、あっさりと Fog の後ろについて歩き出した。 今までの押し問答などまるでなかったかのようにだった。

「ちょ、ちょっとお待ちください！ あなたここを通さないとさんざんごねておられたじゃありませんの！」

「あなたと遊んでるうちにすっかり目が覚めてしまいました」

「え？」

「ですのでここで寝る必要はもうありません。 ご自由にお通りください」

「……わたくしも行きますわ！ フォグ様よろしくて？」

そう言われてフォグは戸惑った。話しかけられるまでグリゼルダだとは思ってもみなかった。グリゼルダとは多少の面識はあったがこのような路上で大魔王と喧嘩しているなどとわかるはずもない。

「え？ グリゼルダ嬢？ いや、いいけどよ、そんな貴族のお嬢様が行くような店じゃないぞ？」

「かまいませんわ！ 大魔王が行くというのですからいいでしょう！」

そういうと、グリゼルダもフォグの後につく。

「お嬢様……」

後に残された侍女と御者たちは途方にくれてしまった。

「遅いな……」

久しぶりの娘との食事を楽しみにしていたブルーノは豪勢な食事を前に待ちくたびれていた。

まさか大魔王と押し問答したあげく、下町の酒場に向かっているとは夢にも思っていなかった。

路上にて（後書き）

昔住んでたところの近くで、道の真中で寝てしまって邪魔な犬がいたなあ、と思いだしたのが元ネタですw

テデスコさん（前書き）

web 拍手に載せてないやつです。

web 拍手の方にもひとつ追加しました。

テデスコさん

今日もまたあいつがやってくる。

どこに逃げても無駄なのはわかってているが、あがかないわけにも
いかない。

あの小さな体のどこにそんな力があるのかはわからないが、あれ
は常軌を逸している。あれは暴虐の塊だ。

魔界広しと云えどもあそこまで急激に成長しているものはそうは
いない。

どこに逃げようか。そんなことばかり考えている。

なんで俺があんなのことばかり考えなくてはならないのか。ス
トレスでおかしくなってしまうそうだ。思わず足の一本にかぶりつ
く。多少落ち着いたがこんなことを繰り返しているとまた足が減っ
てしまう。

散々うろついたあげく巨岩が立ち並ぶハゲ山へとやってきた。こ
こまでくれば大丈夫とは言えないが、とにかく距離は稼いだはずだ。
岩と岩の隙間へと体を押し込む。軟体ゆえに出来る技だ。完全に
体を岩の隙間の闇へと押し込めるとようやく落ち着いてきた。

これはいい。闇と狭所が包みこむようで安堵感が込み上げてくる。
ここなら大丈夫だ。

「テデスコさん」

全然大丈夫じゃなかった。悪魔の呼び声がする。いや、俺も悪魔
だがそういう意味ではない。比喻表現としてのアレだ。

畜生！　なんでこんなところまでくるんだよ。おとなしく森で暴れ
てろよ。いや、おとなしく暴れるってなんだよ？

俺が自問自答していると、俺を包み込む岩の隙間がゆっくりと広
がっていく。

今日もだめだったか……諦めと共に見上げる。
そこには巨岩を軽々と持ち上げているガキがいやがる。あいつだ。
パエリア・グネル・ガンボア。確かそんな名前だったはずだ。

「テデスコさんは狭い所好きですよね」

少女は持ち上げていた岩を放り投げた。それは山の斜面に激突し
ハゲ山の奇景をさらに奇妙なものへと変える。

黒髪黒目の少女。髪は手入れをしていないせいかわさつとしたも
ので肩のあたりまである。この少女がここ最近のストレスの原因だ
った。ずっと追い掛け回されている。

「なんで……なんで俺がここにいてわかった！」

蛸が叫んだ。巨大な蛸としかいいようのない怪物が叫んでいる。
ただし蛸としては奇妙な事に足の数が少ない。四本しかなかった。

「テデスコさん、ぬめぬめしていますからね。粘液の後を追ってく
ればいいだけです」

まだ幼く見える少女は自慢気に言った。

「そんなことかよ、ちくしょー」

テデスコは少女を憎々しげに見た。こんなガキに何びびってるん
だとは思うが、実力が違いすぎる。

その少女だがいつもと様子が違った。なんだろうと考えるとすぐに分かった。服だ。今まではボロ雑巾のようなものを見にまといほとんど裸同然といった格好だったが今日はひどく豪華な装いだっただ金色の毛皮を身にまとっている。肩口には狐の頭部がのっかっていた。その顔には見覚えがある。

「お前……その狐は……」

「ん？ お友達ですか？」

「いや、友達っていうかその女狐にはよくいじめられてたんだが……そいつ三尾のフィリパじゃねーのか？」

「名前までは存じませんが、確かに三本ありましたね、ほらほら見てください」

そう言つて少女はお尻をテデスコに向けてふりふりと振った。そこには三本の狐の尻尾がついている。

「勝ったのか？」

「はい」

少女はあっさりと口にした。信じられない。

「お前何歳だっけ？」

「こちらに来たのが十歳ぐらいの時ですね。それから一年近くいると思いますので十歳から十一歳の間ぐらいかと思います」

「あの狐の一族は百年で一尾増える。フィリパは三百歳近かったはずだ……」

ふざけるなと言いたい。一年やそこらで三百年近い年月の差を埋められてたまるか。

「そろそろ服が欲しいと思っていたのでいい毛皮が手に入りました。でも毛皮だけ手に入れても私には加工技術がありません。とりあえず何かくつつけるものが欲しいと思いまして蜘蛛の方の所へ出向きました」

「蜘蛛……ってリュディアの森の主か？ あ蜘蛛女かよ」

「多分そうですね。で、私は蜘蛛が粘着性のある糸を吹き出すと知っていましたのでお腹のあたりをもちでぴゅーぴゅー出して毛皮を適当にくつつければいいと思ったのですが」

「もいだのかよ！」

「いえ、狐さんの体を担いでいつてその旨をお伝えしたら、勘弁してくれと。服なら作ってやると言われまして。で、この素敵な服が出来たのです！ どうです！」

少女がその場でくるりと回転した。良く出来た毛皮のコートだ。とても似合っている。コートの内側にも新しいシャツとズボンを着ていた。こちらは狐の素材ではないので、蜘蛛の糸を織り込んで作ったものようだった。

「まあ……三尾の死体を見せつけられたらそうなるだろうな……で、今日は何しに来たんだよ」

「え？ ですからこの服を見せに来たのですが」

「それだけかよ！」

「あ、それと修行は別ですよ」

そう言う少女は手刀を繰り出した。テデスコの大きな頭部に遠慮無く叩きつけられる。テデスコの丸い頭部が限界まで歪められ岩壁にぶつかった。

「ぺげらっ」

変な声が出た。衝撃を無理やり逃がす。背後の岩が爆発するように砕けた。

「お……お前いきなり何しやる！」

「やっぱりテデスコさんは頑丈でいいです。今まで会った中で一番頑丈です」

「頑丈なんじゃねーよ！ 衝撃を逃してるだけだ！」

「いえいえ、それがいいんです。逃し切れない攻撃を身につけるのが今の目標です」

「なあ……それ完成すると俺どうなっちゃうわけ？」

「死ぬんじゃないですか？」

可愛く小首をかしげながら言う。そんななんでもないように言わないでくれとテデスコは悲鳴をあげたくなった。

「嫌だよ！ なんでそんな修行とかで殺されなくちゃいけないんだよ！」

「わかりましたよ。ぎりぎりです。まったく……わがままです」

「死にたくないってわがままなの！？」

「大丈夫ですよ。冗談です。テデスコさんはお友達ですからね、殺したりしません。……多分」

また唐突に攻撃が始まった。手刀が上から下から自由自在に襲いかかってくる。

「たべっえ」

「のげそ」

「ぼばあ」

「ひげえ」

ぎりぎりだ。ぎりぎり衝撃を何とか逃していた。受け流された攻撃はあたりを破壊していく。酷いありさまになっていた。このあたりに主がいるなら黙ってはいないだろうという惨状だ。

「なあ……本当に俺を殺すつもりはないのか？ 本当は俺が憎くて仕方ないとかいうことはないか？」

「え？ ああ、手加減とか忘れてました。でも今のところ大丈夫そうじゃないですか」

「……俺死ぬよな……そのうち……」

ひとしきり暴れて満足したのか少女は攻撃をやめていた。

「そういえばデスコさんは何故四本足なのでしょうか？ お腹が空いて食べちゃったのでしょうか？」

「食べねえよ！ いや……たまに食べることはあるけど……いや、そうじゃなくて四本は賭けで取られた」

「どういことですか？ 取られても生きてきそうですか？」

「あー、そういうんじゃないんだよな。なんつーのか、足そのものの存在を奪われたというのかな。まあこのままじゃ生きてこねーよ。奪い返さない限りな」

少女はそれを聞いて何か考え込んでいる。もしや、と思う。友達だと言っていたし取り返してくれるのかと淡い期待を抱いた。この少女の強さならあいつにでも勝てるだろうと思った。

「……私は蛸についても詳しいのです」

何か思っていたのとは違う展開だった。そこは取り返しに行きましようとかじゃないのかと疑問に思う。

「蛸の足の一本はおちんちんだと聞いたことがあります。それも取られたんですかね？」

少女は興味津々だった。

「……ノーコメントだ……」

「あー！ やっぱりないんですね！」

「ノーコメントだって言ってるだろうが！」

少女が追求を重ねようとした時だ、山の上から岩石が降ってきた。斜面に突き刺さったそれはゆっくりと身を起こす。それは巨大な岩石で出来た巨人、この山の主だった。

「貴様ら！ ここで何をしている！」

凄まじい大声だった。怒りに溢れている。自らの縄張りをいいように荒らされたのだから当然の反応だった。

「うるさいです！ おちんちんの話をしているのに邪魔しないでください！」

少女は振り向きもせず腕を背後に向けて一閃した。それは敵の位置をろくに確認もせず放たれたものだったが、あっさりと巨人を上下に両断し、背後の山の斜面に深い傷跡を残した。

テデスコはそれを呆然と見ていた。明らかに自分に対して放っていた攻撃と威力が違った。あの一撃を受けて無事でいられる自信はない。

この山の主がどの程度の実力なのかは知らなかったが、この規模の山の主なら相応の実力者のはずだ。それを一撃で倒すのかと思う

とストレスで胃が痛くなってきた。いつそれが自分に向けられるのかわからない。

「お前……あんなこと出来るのに、なんで俺で修行してんだよ！」

「今のはずるです。魔力を使いました。私の目標は魔力なしでテデスコさんを死ぬ一歩手前まで追い詰めることです」

「その目標は嫌すぎる！」

「さて、ではどの足がおちんちんなのかの話に戻しましょう！」

「嫌だよ！ 戻りたくねーよ！」

「おちんちんが取られたのなら取り返してあげますよ？」

一瞬心が揺らいだ。そしてそれを少女に見透かされた。

「あ、やっぱりそうなんですネ」

少女が勝ち誇ったような顔をしていた。

「まあ、そういうことなら取り返してきてあげますから」

テデスコは体だけでなく、心まで傷めつけられているような気がしてきた。

「ちょっと！ あなたさつきからなにをおっしやっているのかしら！」

グリゼルダが木製のジョッキをテーブルに叩きつけながら叫んだ。

酔っ払っている。

「はい。なんだかテデスコさんの実在を疑われている気がしましたので、テデスコさんとの心温まるエピソードを語ってみたのですが」
対するは大魔王。同じテーブルにつきもぐもぐと肉を平らげている。

フォグ、アイゼンも同席していたが、グリゼルダの剣幕に押されて何も言えない状態だった。

「それにさっきから、おちんち……下品な言葉を連呼しないでください。さらない!？」

「ああ、正確には生殖器ですね。テデスコさんの触手には排尿の機能はありませんので」

「そんなこと聞いてませんわ!」

荒ぶるグリゼルダをフォグがなだめにかかる。ここはアレがヤバイ亭の一席だ。馬車で通る通らないの問答の後ここにやってきた。

「それにさっきから聞いていると、そのテデスコさん? とやらの心情までベラベラと! そんなことがわかるものですか!」

「ふふっ、嫌がらせには相手の心情を察するのが重要です、テデスコさんはきつとそう思っていたに違いありません」

それを聞いてグリゼルダは愕然とした。

「もしかして……さっきのあれもただの嫌がらせですよ!？」

「さあどうでしょう? まああなたが出てくるまでは単にあそこで寝ていようというだけだったんですが……」

「やっぱりですね!」

「そういえば、結局デスコさんの足を取り返しに行っていないませんでした。約束ですからね。そのうち行っておかないと」
「どうでもいいですわ！」

絡みぐせのあるグリゼルダを飄々と受け流す大魔王。結局こんな酒宴は朝まで続けられた。

グリゼルダの父親、ブルーノは結局いつまで経っても返ってこない娘を一晩中待ち続けた。

翌朝、べろんべろんに酔っ払って朝帰りをした娘を見て卒倒しそうになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2380y/>

大魔王のひみつ（大魔王が倒せない番外編）

2011年11月20日03時59分発行